

とよたプレーパークの会

調査団体名	: とよたプレーパークの会	団体代表者名	: 小黑敦子
設立年	: 2004(平成16)年9月	対応してくれた人の名前	: 小黑敦子
団体URL	: http://toyotapp.exblog.jp/		
活動拠点	: 豊田市鞍ヶ池公園	調査員	: 近藤 朗、真柄明洋
取材日	: 2014年11月22日	レポート作成者	: 近藤 朗

活動内容

プレーパークとは、従来型の公園、既成の遊具によるお仕着せの遊び場ではなく、子ども達の想像力により遊びを生み出す事のできる「子どもが主役の公園」である(デンマークが発祥と言われる)。子供たちのためにも、こんな遊び場が欲しいと思った豊田市のお母さんたちが、「ないなら作っちゃおう！」と勉強し、さらに仲間づくりをしながらプレーパークを開催した。幾多の変遷を経て、現在は豊田市鞍ヶ池公園の一角で1ヶ月に2~4回の冒険遊び場を開催している。

(調査員が訪れたのもこの活動日で、公園の中の坂道を上がったわかりづらい場所であったが、きわめて魅力的な秘密基地の様相で、一見放置状態のように見える子どもたちの歓声が飛び交っていた。)
活動としては他に定期的会合や講演会を実施、地域にプレーパークを作りたいという人たちへの支援も展開している。

●**創生期** …お散歩サークル「おひさまクラブ」(H15年~ 現在も活動中)の小さい子を持つお母さん8人達でH16年「とよたプレーパークの会」発足、H17年3月に高橋交流館で初開催、H17~20年は寺部町守綱寺裏庭で定期開催。共感し共に活動する仲間づくりが重要な時期であった。

●**鞍ヶ池公園時代** …鞍ヶ池公園再整備計画の一環で豊田市公園課から話がありH20年春に移転。H21年4月からは市の委託事業として定期開催することとなり現在に至る。子ども達だけでなく、お父さんも参加できる、お母さんもイキイキできるプレーパークが定着した。

●**これから** …子どもたちはどんどん大きくなっていくが、設立時メンバーの小黑さんが現在も代表として活躍。プレーパークには「卒業がない」と言う。課題として公園側の事情から、H27年4月には慣れ親しんだ現在の場所から同園内の植物園付近に移転しなければならず、奮闘中である。

キャッチフレーズ

子どもたちがちゃんと失敗することのできる場所をあげよう! ~人の「生きていく力」を育む遊育~

- ・ 怪我と弁当は自分持ち
- ・ 心が折れるくらいなら、骨折った方がいいよ

会のモットー(何を大切にしているか)

- プレーパークは「オープンである」 …誰でも、その場で参加できる
- プレーパークには「禁止事項がない」 …むろんトラブルやケンカ、悩みや戦いもある。何かあればその場で話し合いルールを決めることとしている(解決力育成)。ここでは、子どもたちだけでなく親同士もよく話し合う。

設立から現在に至るまで変化したこと

- 当然の事ながら、年齢層が上がってきた。プレーパークには卒業がない。小さな子は少し大きな子に。運営する側をやってみたいという子も出てきた。新しい人たちも入ってくる。この会自体が成長していくということ。
- 豊田市内にも育児サークルがたくさん出来てきた。プレーパークから派生したものもある。ただ育児サークルは子どもが大きくなれば人は変わっていく。そういった意味で「卒業のない」プレーパークの会が育児系ネットワークの中で頼りにされている面がある。子育ての会、グループは人の繋がりの中で楽しく「ごちゃまぜ」になっていて、その中で役割を果たせたらいい。年3回程度、話し合う会を開催している。

連携している団体・専門家・自治体など

県内のプレーパークの会；てんぱくプレーパーク、にいのみ池（緑区）プレーパーク、その他
庄内緑地公園近くの団地内、知多市（そうり池）、東海市、三好市など

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

小黒敦子代表は現在、（豊田市企画政策部企画課）おいでん・さんそんセンターのコーディネートスタッフも務めているものの、とよたプレーパークの会が山村再生に関わっているわけではない。（鞍ヶ池公園は都市近郊に位置する）そもそも今回、この調査にプレーパークの会を対象としたのは、山村再生担い手育成の本質的な部分としての「人を育てる」活動を展開している団体だからである。

そういった意味で小黒さんから提示された

●与えられた既存のモノではなく、自ら考え想像力によって行動する力を養うこと

●決められた禁止事項によらず、問題発生時に話し合いながらルールを決める課題解決力、及び調停能力の育成

●プレーパークで主役となる子どもたちが大きくなり、次は面倒を見る側へと成長していく過程

さらに●プレーパークと育児サークルのメンバーがごちゃまぜに繋がって交流する（豊田市らしい）ネットワーク機能などが山村再生にも通じるキーワードだと感じた。

最も重要な点は、プレーパークでは、子どもたちだけでなく親たちにとってもお仕着せではない運営にやりがいを感じて積極的に取り組んでいる点。ある意味わずらわしい手法であり、役所だのみの都市的、効率的な教育とは正反対のものであるが、小黒さんは「このプレーパークがなかったら、うちの子はどうなっていたのだろうか？」とまで仰られた。

現在直面している課題

H27年4月の鞍ヶ池公園内での移転問題がある。プレーパークとしては現在地の方が適していると思うが、一般利用者にも使いやすいようにとの豊田市側からの要請である。現在、具体的な部分での話し合いが、うまくいっていない。

今後やってみたいこと

中高校生など大きな子たちの居場所づくりをしてみたい。

チームオリジナルの質問 【遊び場・公園についての対談】

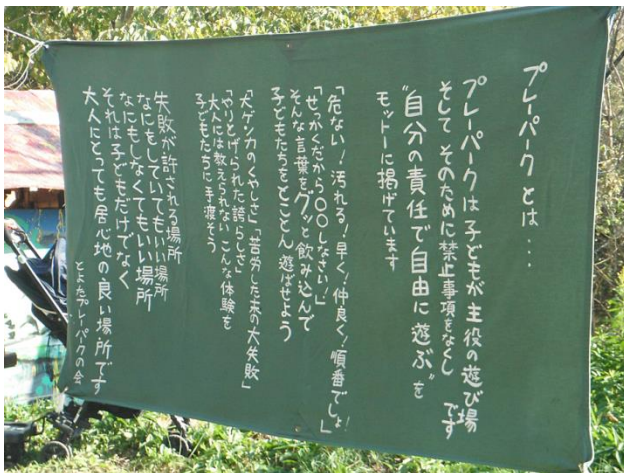
【調査者（近藤）】私は現在県営公園の指定管理者として、（公共）公園とは一体何なのだろうかと考え続けていました。自分なりの結論として、広い意味での「人を育てる場所」だと思い至ったのです。このプレーパークを見て正に公園利用のあり方としても相応しいものだと感じます。これは、社会（地域）で子どもたちを育てることの公共性の高さを確信しているから。一方で、本来の公園管理者である行政が指定管理制度を導入したことから現場感覚が薄くなり、私たち現場の者とズレが生じています。プレーパークを市から受託されている立場として、どう思われますか？

【小黒代表】プレーパークをつくるにあたって、当初は豊田市の次世代育成課にしつこく相談、鞍ヶ池公園においては公園課とよく話をしながら進めて来ました。良好な関係を築いてきたと思います。この公園は指定管理ではなく市が直接管理していますが、しかしながら私たちとの関係については以前と比べて、随分とズレを感じるようになりました。4月に控える移転の話もそうですけれど、話が通じないこともありますね。当然の事ながら市の担当者も代わっていき、その度に何度も説明をすることは厭いませんが、予算も減り、大事な部分が引き継がれていけないのは哀しいですね。

【近藤】私は県から派遣されている立場でもあり、予算が削減されたり職員が減っていく現状は理解できます。でも、鞍ヶ池でのプレーパークはお母さんたちと市が二人三脚で進めてきたようですし、その理念的な部分が十分継承される仕組みが必要だと感じました。役所もコンパクトさを余儀なくされる中、次世代の人材育成が急務となっています。行政など組織も人が基本だとすれば、人を育て続けるプレーパーク的な社会は一つのお手本のような気がします。山村、だけでなく都市など地域の抱える課題についても同様かもしれません。

写真

鞍ヶ池公園プレーパーク



取材風景。右が代表の黒さん